新発田川と関係の深い施設

◆清水園　庭園の水は新発田川から引く

清水園は、新発田川の水を引き込んだ庭園を有する旧新発田川藩主の下屋敷であった。現在は新発田川の水質が悪く、川の水を使えない状態である。

庭園が主役の清水園は、景観の中心に「草（書）の水の字の形なり」という池泉の複雑な池縁をめぐらし、その周囲に茶亭を配した池泉廻遊式庭園である。新発田川の水を引き込み、南西部の岩島や南東の岩島、また北西部の中島などに石橋を架けて観賞できるようになっている。近江八景をとり入れた純京都風であり、広さを感じさせない巧みな遠近法を見せている。

庭園の広さは15,180m²、作庭したのは、遠州流の茶人で、幕府茶道方の県宗知である。元禄文化の舞台が越後新発田にも整い、藩主や家臣らを茶の湯、能楽の世界へ誘うことになる。

建物は、寛文六年（一六六六）に建てられたもので、寄棟造りの落ち着いた数寄屋建築で、平成一五年（二〇〇三）に国指定の名勝となった。

また、明治戊辰の役に際しては、数千に及ぶ領民が藩主直正の出兵を止めるよう訴願し、直正はやむなく、この清水谷御殿に駕籠を留めたため、新発田藩は出兵を免れたという歴史的な舞台となった所でもある。

清水園パンフレットより

清水園庭園

清水園パンフレットより

清水園（空撮）

◆石泉荘　うちには川が流れている

庭の中央に新発田川が静かに流れ、昭和初期までは筏流しがあったという。石泉荘に入ると、意匠を凝した石畳、簡素な佇まいが目につく。この庭にくり拡げられた四季の自然美、折々の風情が十分に鑑賞できる。花木五百本余、それぞれ特徴を持つ。明治初期焼失後、藩臣家屋の古材を使って再築されたもので、杉材で客室・板敷・廊下など実に簡素な建築である。大正十年、八十四才の当時の歌人、初代新発田町長・原宏平氏は「石泉荘の庭を見て」と題し、

「山ありて　やまおもしろく　瀧ありて
たきおもしろく　見ゆる庭かな」と歌った。

邸内には、その書が残る。

石泉荘庭園